

第3章 いじめに対する対処とその発達

丸 山 広 人

1. 対処への注目

我々の日常生活の状況は日々変化し、その中で生み出される対人関係も様々に変化しうる。学校生活においても席替えや班替えによる友人関係の変化、クラス替えによる学級雰囲気の変化、学級担任との相性の問題など、児童・生徒は様々な問題に遭遇する。いつものように家を出て学校に集団登校をしていると、班長である上級生が突然、「あいつを無視しよう」などと半ば強制的に命令してきたり、いつの間にかある女子が「汚い」などと言われ避けられていたり、急に友人が話しかけてくれなくなったりなどのことは日々の生活では起こりうる出来事である。そしてこの出来事は私に対処 (coping) せねばならない課題として自身に降りかかってくる。上記の例で言えば、上級生の命令に従うのか、拒否するのか、理由を問うてから判断するのか、周囲の人と合わせるのか、班長をたしなめるのかなど、その状況の中にいる場合、とにかく何らかの対処を始めねばなるまい。

これまでのいじめに関する研究では、その実態調査や集団構造・心理構造の解明、または、いじめ解消に向けてどう取り組むのかという視点からの研究が数多くなされてきた (いじめに関する先行研究については第7章参照)。しかしながら、実際に個々人が遭遇する「いじめと呼ばれる出来事」に対して、その時如何に対処 (coping) したのかという具体的側面からの考察はこれまであまりなされてきていないようである。そもそも、「いじめ」とは様々な現象を含んだ抽象的な用語であるのだが、いじめの渦中にあるその現場において当事者たちは、自分の遭遇している事態を「いじめ」とはあまり語らないように思われる。実際に起こっていることは「無視された」、「殴られた」、「嫌なことを言われた」、「友だちを取られた」、「仲間が逃げていく」、「避けられる」など具体的である。そして、当事者たちはその具体的出来事に対処しているのである。つまり、いじめへの対処という問題設定においては現象を「いじめ」と一括して捉えることが困難なのである。このため本章では「いじめに対する対処」を考察する上での方法として、自分の体験した「いじめと思う出来事」を想起してもらい、その時如何なることを行ったか、つまり如何に対処したの

かという側面からアプローチしてゆくこととする。

対処 (coping) とは一般に、「困難な状況 (いわゆる、ストレス) において、心理的に傷つくことから身を守るために、それらの状況を自分なりに処理、操作しようとして試みる認知的ならびに行動的レベルにおける一群の反応セット」として定義される⁽¹⁾。いじめ問題に引きつけて考えると、あるいじめ状況に遭遇した時、その状況によって心理的に傷つかないように自ら操作を加え処理しながら、何らかの行動を起こすということになるだろう。ここで注目すべき点は、対処という概念が、単に困難な出来事を“克服”したり、“解決”するということだけではないことである。ラザルス (R.S.Lazarus) らによると、対処に重要なことは、その困難な事態を打ち負かし克服するだけでなく、例えばある困難に“耐えたり”、困難を“最小にしたり”、困難を“受け入れたり”、“無視したり”、“距離をおいたり”しながら困難を“切り抜ける”ことである⁽²⁾。本調査の被面接者たちが「いじめ」に対処する際にも、時に困難を克服し、時に困難をかわし、または受け入れて、行動や感情を管理し自尊心を維持する例は少なくない。

以上のようにしてなされる対処は、変化する状況の中で行われる努力であるから、一度では終わらないことが多い。ある困難に立ち向かったり耐えたりすることによって、更に事態は変化しそこで更に対処が起こる。つまり、対処はプロセスとして見る必要があるだろう。そして、そのプロセスを生み出すものは、自分が遭遇したある事態に対して如何なる評価を下すのか、如何なる感情がわき起こってくるのかという点である。その評価や感情の中でこそ、すでに対処は始まっておりその方向性も決まってくる。集団のボスに無視されたその時、むかむかと反抗心が湧いてきて「仕返しをしてやる」となるのか、怖いという恐怖で足がすくみ、「この人には逆らわないでおこう」となるのか、または何とも言えない嫌悪感を抱き「もうあの人とは遊ばない」とボスを避けるのかということこそ、すでに対処が始まっていることを物語っているのである。本章における対処への注目点は、事態を変化させるために如何なる行動をしたのかという所だけでなく、そのような行動を起こせしめる評価過程

や情動の変化にもふれていくことにある。このような評価過程は、つまるところ、起こっている出来事を自分が自分自身にどのように説明するかということであり、この「自分への説明の仕方」が事態を引き受け、飲み込み、事態を収めていくその人なりの対処を形作っていく根拠となるのである。

本調査では、被面接者に対して「いじめ」を定義することなく、いじめだと思ふ自らの体験を語ってもらったため、数多くの「加害体験」「被害体験」「目撃体験」の三つの立場からの「いじめ体験」が収集された(3)。そのデータを分析すると、ある時期に発生しやすいいじめが特徴づけられるように思われる。例えば、小学校の低学年で「集団」のことが語られることは少なく、また、中学校において嫌なことを言われて「人前で大泣きした」などという例もほとんど語られることはない。従って、集められた「いじめ体験」を整理し記述する際には、発達段階（学年差）を考慮に入れて、その時期に特徴的ないじめの事例を挙げながら、対処について考察を進めていきたいと思う。以下、小学校低学年、中学年、高学年、中学校、高校と学年を区切って検討していく（尚、以下の事例中の学年はその体験当時のものである。また、本章の事例番号は他章の同一事例番号と同じ人物である）。

2. 小学校低学年の場合

小学校低学年の「いじめ体験」では、直接的な身体的暴力であったり、その関係が一对一であったり、接近の手段としてのいじめであったりという内容のものが多し。ある女子をいじめていた経験のある人は次のようなことがあったと言う。

事例24（小1：男子）

同じクラスのかわいい女の子に帰り道などせっついたり何か物をぶつけたりする。何日かそういうことをしていたある日、その女の子の家の前でいつものようにせっついていたら、その子のお母さんが出てきて、その時「やばい」と思ってそれでもう止めた。

このように未熟な接近の仕方、直接的な暴力などの例が典型例として挙げることができるが、被害者の方はそういう事態に対して如何に対処するのだろうか。いくつか事例を挙げてみよう。

事例7（小1：女子）

ガキ大将のような強い男子にいきなりびんたされたり、ノートにいたずら書きをされていた。

対処→泣いていたら、正義感の強い人が先生に言ってくれ、その子が先生に叱られるということが続いていた。この男子が転校したためそれ以後はいじめられることはなかった。

事例34（小2～3：女子）

男子に髪の毛を引っ張られたり、鉛筆で刺されたり、蹴られていた。

対処→担任の先生、親にも話をしていた。親は先生と話し合い先生が注意してそれでひとまず終わった。

小学校の低学年時においていじめられた時、自らがその事態に対処しようとするというより、担任の先生や親といった周囲の大人の介入する例が多く、またそれが事態を改善している。自分を支えてくれるサポーターとして意識的に友人を選ぶことはまれであるが、事例7のように、自分が泣くことにより、周りの子のごく自然にそれを先生に伝えたり、騒ぎ立てたりといった仕方で、結果的に自然とサポートしてくれていることもある。

この時期の「いじめ体験」の中には、当時はいじめられているとは思っていなかったが、後から思うといじめだったと回顧する人もいる。自分では状況が飲み込めずよくわからなかったと語る人もいれば人ごとのように話す人もおり、その当時の事態にうまく意味づけが出来なかったようである。そのような場合、本人よりもむしろ親の方が先に気づき適切に対処する例もある。

事例38（小1：女）

小1の時に自分は転校してきた。仲の良い友だちはできたのだが、その人たちが自分の机の中から持ち物を全部他の場所に出したり、雨の日は水たまりの中に「座って」などと命令してきた。自分は命令に従って座っていたのでびちょびちょになって帰っていた。

対処→後から思えばいじめだと思うが、その当時の記憶などは覚えていない。ただし、すごくショックだったのでそういうことがあったのは覚えている。その当時は泣いていたと思う。母親には話していないと思うが母親はおかしいと気づいていたようだ。そのようにして過ごす期間が数ヶ月あり、ある雨の日に母親が水たまりに座っている自分を発見して、そこで母が担任の先生に話をすることで終結した。

事例38では小1時にグループ内で起きた出来事である。この人は自分がそれになぜ従っていたのか、きっかけは何だったのかということ覚えておらず、その事態

に対して如何なる評価をしたかは不明である。この場合、親には話していないものの親が気づくことにより終了している。小学校低学年のいじめは、これまで見てきたように、大人の視線からいじめを隠そうという意図はあまりなく、従って大人の目の届く範囲内でなされることが多いようである。自然にその対処も大人の力を借りる、大人に助けをもらうこととなる。

しかし、場合によっては殴られたりしながらも、自分なりの評価に基づいて対処していた事例もある。

事例57（小1：女子）

クラスの男子が自分と仲良しの女子を慕っており、その子が登校してくるまで「まだ来ないのか」「まだ来ないのか」と私のランドセルを何度も殴っていた。自分はそれが嫌で「何で私だけ」と思っていた。

対処→彼の慕っている女子が来るとすぐにそちらに行くことが分かっていた。だから誰かに助けを求めるといふより、なされるがままにしており、早くその女の子が来ないかなあと思っていた。

対処を形作るとき、その時の状況やその事態の見通しが立っていることは、それだけ、自分を守るための最適な行動をとることができると言えよう。この例では、「なんで私だけ」と思いつつも、相手の気持ちや事態が如何なるものかが分かっており「その女の子が登校してきたら殴られなくなる」との評価が可能であった。なされるがままになっていたのも事を大きくせず、それに耐えていることが最適であるとの見通しがあったためだろう。このような状況の把握（遭遇している事態を自分なりに説明できること）は、いじめ事態に遭遇した時に大きな資源となる。小学校中学年になるとそのことがよりはっきりしてくる。

3. 小学校中学年の場合

低学年が一对一のいじめが多いことに比べて、中学年ではグループが形成されはじめ、その存在が大きくなっていくのが特徴的である。教室全体でいじめが起きたり、次第に男子と女子とにグループ分けがなされてくるため、「いじめ体験」の質に男女差が生じてくる。教室全体を巻き込んで異質な者を排斥したり、汚い、不潔などといってある人物を激しく攻撃するいじめが急増してくる（第2章参照）。また、集団内にボスが出現し、集団内の一人をターゲットにしてグループ内の人に無視するよう命じるなど支配・服従の上下関係が生まれてくる。この時期から急増する女子のいじめから見てみよう。

事例60（小3～4年：女子）

小3時に、次々にターゲットを変えて意地悪する女の子がいた。その女の子が「あの子を無視しよう」と言って始まる。自分も標的にされた。

その時の気持ちと対処のプロセス→「今度自分がいじめられたらこわい、次は自分になるんじゃないか」という思いでその意地悪な子に従っていた。その状況については、「たとえ自分一人何か言ったところで何も変わらないという思いがあって、いじめている子がすごい悪いっていうのは分かっているけれども、しょうがないっていう気持ちの方が強かった」。いざ自分がターゲットになると「その子に何か悪いことをしたかな」と大変動揺していたが、結局理由は分からない。そういう時は、「（意地悪な子が）落ち着くまで待つしかしょうがないという感じで皆で接していた」と言う。「次々に仲間はずれのターゲットが変わっていくっていう感じだったんで、その子はもう意地悪する子だっというのがクラスの女子の間ではみんな知っているので『またあの子やっている』『あっ今日は（ターゲットが）あの子になっちゃったんだ』というような感じだった」。

そのようなことが続いたが、4年生くらいになるとその意地悪をする子も少しは自分のことを気づき始めたようであったものの、やはり意地悪であることは変わらなかった。周りの人たちはその子がいなくなるときなど「嫌だよね、あの子」などと言いはじめ団結していた。転入生が入ってきた時にも意地悪な子は転入生を無視したり、仲間に入れないという感じだったが、周りはその転入生と普通に接し始めていた。その転入生の人に対して「あの子（＝意地悪な子）はそういう子だからちょっと嫌な感じがするかもしれないけど」などとも話していた。結局、意地悪されることは変わらなかったが、周囲の子たちがそのように変化していったので、意地悪をされて受ける傷はあまりなかった。

事例11（小4：女子）

グループのボスが全員を率いてターゲットを決めて無視していた。次に無視する人を耳打ちするので、自分に耳打ちされないときには自分が無視されると分かる。その無視はだいたい一週間くらいで終わり次の人に行く。しかしボスの見ていないところでは結構無視されているときも周りの人は話しかけてくれた。

対処→「一週間くらいたってそのボスの所に行って何かよく分からないけど『ごめんね』って言うと、次の人になるんですよ。だから無視され始めて一日目や二日目じゃ終わらないからだいたいみんな頃合いを見計らっ

て、そういうふうに通り返るのを待つみたいな感じで」。

この事例は二年後に皆が「もうこりごり、冗談じゃない」ということになり、今度は皆でボスを見下ろすという形になって終結している。

以上の二例はいずれも中学年以降の女子児童・生徒に数多く報告される「いじめ体験」である。自分がいじめられたのだが、ターゲットになっていない時にはボスに服従し従っていたので、結果的には自分もいじめていた時もあるという構図である。しかし、いじめたといってもその心理はボスに支配され服従させられているので、消極的周縁的な参加者のような感覚でもある。早くには小学校低学年から報告されているが、低学年の場合、それが長く続くことはなく一日で終わったなどという例があるのに対して、中学年ではボスの支配は長く続く。あの人を見下ろすようにボスに言われると、まず「自分が次にされたらどうしよう、ボスに従わないと自分に回ってくる、怖い」という思いが先行する。従って、自分を守るだけで精一杯になりそれがボスに従うという対処となる。自分がターゲットになってしまった場合には誰も話しかけてくれなくなるのだが、その時、その状況を打破する心理的資源と対処のための道具・鍵がないわけではない。

心理的資源としてはターゲットと消極的周縁的な参加者たちが同じ心理を共有していることだろう。事例60では、ターゲットになったときには動揺して「嫌だ、つらい」と思うのだが、その反面、「またあの子やっている」「あっ今日は（ターゲットが）あの子になっちゃったんだ」という一つの構図が見えている。また、ボスに対しては「もう意地悪する子だっているのがクラスの女子の間ではみな知っている」ということが分かっている。それを示すように事例11においては、ボスの見ていない所では見下ろされているときも周りの人は話しかけてくれたと言う。自分のグループメンバーたちが同じ心理を共有しながら陰で支えてくれているのである。

また、自分が遭遇している事態は、くるくるとターゲットが回っているのだと自分に状況の説明がついていることも大きな支えになり、それが耐える力にもなっている。この状況を打破する鍵となるのは、どのようにしてこの状況が収まるのかという終結ポイントが分かっていることだろう。事例60では「ボスが落ち着くまで待つしかしょうがない」と待つことで事態が改善することが分かっており、事例11においては、見下ろされて一日や二日では事態は改善しないので、一週間くらいと“頃合を見

計らって”理由は分からずともとにかくボスに謝りそれで事態は収拾する。そのように通り返るのを待っていればターゲットが次の人になるという内々のルールがあるようである。このようにして終わる事例は他にも多数報告されており、支配しているボスでさえも、グループ内に見えないルールに気付かぬうちに従っているように思われる。

次に、中学年以降の男子に特徴のないじめ体験に移ろう。男子の場合、女子とは随分と異なり、身体的な暴力の例が多く語られる。被害を受けた男性は当時を次のように語った。

事例14（小4：男子）

「小学校4年の時でしたかね。二人の男子が、何かいろいろ気に入らなかったのでしょうね。これは本当に身体的な暴力かな。（僕がこの二人に）殴られたり蹴られたりしていたのかな。二人でしたけど、…どうも目の敵にされがちだっているのがあって。それでいじめられたというのがあった。」

対処→目の敵にされて殴られたり蹴られたりしたことに対して「こちらはやる気がなかったから向こうからやってきて。自分は手を出さなかったんじゃないかな。靴で蹴られると痛いから、靴を脱がしたりしてやらせていた気がするな」。

本事例の対応では、何とか自分が「やられている」という事実を自分が受け入れやすくする努力がなされている。つまり、自分が暴力に屈して「やられている」のではなく、相手の靴を脱がせて「やらせている」のである。全面的に「やられっぱなし」というより、こちら側が一歩高見に立ち、相手を操作する部分もつくり、そこでは関係を逆転させて対処している。靴を脱ぐようにと指示しそれに従わせているのである。“殴る－殴られる”の関係でなく、“殴らせてもらう－殴らせてやる”関係に近くなっているように思われる。暴力を被るという如何ともしがたい状況には変わらないが、心理的に受けるダメージは最小にくい止めることができよう。しかし、これは殴る行為を媒介として相互に相乗的な連鎖の関係になりうる対応でもある。この例が典型であるが、男子の場合、如何に自分が“下っ端”扱いされないかということが対処を形作る上で重要なポイントとなる。自分がいじめられている状況からは逃げることなく、しかも下っ端扱いされないように事態を乗り切ろうとすると見えよう。似たような事例は他にもある。

事例1（小4～：男子）

「悪口はもう何回言われたか分からないくらい言われていますし、口で言われてメソメソするように、そこまで（自分は）弱くないんで。そんなもんは言われたら言い返すとか、うるせーとかその程度で済みますし、殴られて痛てーよと思ったら、相も変わらずやり返していますからね。しかし、その悪口に対しては「悪口って言うよりそれが愛称って言う感じになっちゃってて。自分でも例えば僕、太っているんで、例えばよく“デブ”というのがありますけど、…もう悪口っていうんじゃないんで、僕らの愛称って感じで。だから別に僕も全く気にしないで、それでいい。例えば自分が『デブ』っていわれても、『何？』って応えるって感じですから、それはまあ、悪口じゃないのでね」。

男性が「被害体験」を語る際、「でも自分も言い返していたから、それはいじめではない」「やり返したからこれは喧嘩だった」という場合がある。事例1の男性は、小学校3年くらいから中学時代にかけてずっと、ふざけ程度だがいじめられていたという人である。気持ちではいじめられているのだが、何とかやり返しながらかり抜けてきたようである。メソメソするほど弱くない、こちらから手を出し、やり返しながらか自分を守っていたというが、一方では「デブ」などと下っ端扱いされかねないレッテルを貼られてもいた。自分の太った体型を突かれた場合、それを悪口ではなく「デブは愛称」とし、悪口ではなく愛称として受け入れていく努力がなされている。ここでも、心理的ダメージを最小にする努力とともに事態を受け入れていくことの試みが見られる。

女子がある種の暗黙のルールやグループ内の人とある心理を共有し、それが一つの支えになっているなど横の関係になるのに対して、男子の場合、個々人の上下の位置関係において、下位に位置づかない努力がなされるなど縦の関係になっていると言えよう。

これまでは本調査で得られた男子及び女子におけるいじめの特徴を検討してきたが、中学年以降に頻繁に出現する特徴のないいじめはもう一つある。ある特定の人を「汚い」「臭い」と言い「～菌」として扱い排斥するいじめである。この種の「いじめ体験」は被害者、加害者、目撃者の三者それぞれの立場から数多くの報告を得られた。それだけ学級全体を巻き込みながら生起するいじめである。このいじめでは、加害者側はいじめたという気持ちがなく、かえって不快感を排除している気持ちが強いこともある。まずはその例から示そう。

事例26（小3～4年：女子）

クラス的女子全員がある一人の男子を嫌っていて、その子には触ってはいけないという掟があり、もし触った場合はみんなでそれをタッチして回していた。席が近くなって同じ班になるのを嫌がったりもしていた。「たぶんその時の、みんながいじめていて楽しいというのはなくて、本当にみんな嫌いで、近づかないでっていう感じだった」。この男子は行動がのろく、ほとんど話をしない子でイライラさせられることが多かった。しかしながら、この男子に対して他の男子たちはそのように接してなかった。

事例26では、いらいらさせられる気持ちの対処としてなされていたので、結果的にはいじめていたことになろうが、内実はその子と離れておきたかっただけで自分たちも楽しんでやっているわけではない、いじめているわけではないという思いが強い。

この事例では、触ってしまったときにはタッチをして回る、避けるという内容だが、同内容を「えんぴ“ばりあ”」という呪文語と共に話される事例もある。ターゲットのもつある汚さや菌をバリアして自分を守ろう、自分と相手との間に境界線を引こうとの表現である。しかし、それだけではなく「えんぴ“ごっこ”」と言われる場合もあるように、その人の持つ菌を触った人が鬼のような役になって、そこから鬼ごっこが始まるというように、ある種の遊び的な要素も含まれている。教室内で「汚い」というレッテルが貼られた場合、周囲の者からバリアを張られ、かつ勝手に遊ばれてしまうのでその対処は困難を極める。次に被害者側からの例を示そう。

事例66（小3：女子）

主にクラスの男子二人から、「汚い」などと言われ、給食の上から雑巾を叩いてほこりを落とされたり、机を離されたりしていた。なぜそのようなになったのかは分らなかった。

対処→先生には死にたいとまで言ったかもしれないけど何もしてくれなかった。親にはそのようなことは言えないし、友だちは見ても何も言ってくれなかった。自分がしていたことは、「私の性格的にやられたらやり返すタイプだったから…叩いたらたたき返すとか」であった。

このように周囲が自分を助けてくれないとき、本人だけの有効な対処は見いだせず、何とか一人で気持ちを維持して対処するしかないようである。事例66ではその後クラス替えをしてこのようなことはなくなっていた

が、中には長期化する事例もある。幼稚園時代からいじめられ、特に小学校の低学年から中学年時に激しくいじめられたある女性は次のように語る。

事例63（幼稚園～中3：女子）

幼稚園の時から太った体型のことを男子から罵られ、小学校に入学してからも男子に意地悪され、次第に「えっぴごっこ」をされていた。女子には何も言われず友だちもいたが、その友だちも、自分が攻撃されているときには男子に止めるよう言うてはくれず笑っているだけだった。

その時の気持ち→「ずっと、男の子は嫌だったですね。助けてほしいとは思わないけど、やっぱり男の子がいない方がいいなと思うてました。（やめてよ）言うんですけど、だんだんひどくなるんですよ、何で分からないんですよ、ほんとに。でも、とにかく言われるんですよ。…体型とかがこんなんだから、もっと痩せなきゃとか思ったりとか、何かもう学校嫌だとか結構ありましたね。自分が悪いと思うていたんで…」。

男子たちはなぜそのように言うのかという文脈が分からず自分には説明できない状態である。自分には何が原因なのか説明できないのだが、相手ははっきりと攻撃する理由があるかのように執拗に攻撃してくる。周囲も助けてくれない。そのため「なぜそうなるのか」を自身に説明するには、原因がはっきりしているかのような男子たちの言うことに理由を求めざるを得ないだろう。相手の言うように、自分が太っているからだというところに原因を帰属させざるを得ない状況に追い込まれ、自分が悪いからだとして自己非難して事態を切り抜けようとする。そのように自他ともに評価が定まってしまうと新たに対処するきっかけが失われてしまい事態は固定化、長期化するのだろう。

被害が長期化する例では、小学校中学年時にレッテルを貼られ、そこからいじめられることが始まっている例が少なくない。次の例も、レッテルを貼られ事態の評価が固定化されてしまったがために被害が長期化しているものである。

事例25（小4～中3：女子）

鼻くそをほじっていてそれを食べているところをたびたび見られてしまい、そこから皆に避けられるようになってしまった。「汚い」「目が腐る、触るな、寄るな」などいろいろと言われた。小学校が終わる頃には鼻くそをほじるのはやめていたけれども、そのことを特に男子に

は分かってもらえず、中学校3年間も避けられていた。当時の気持ち→「何であの時にあしてしまったんだろうって。そうでなければ、中学校でも友だち一杯作っていたのになって。…やっぱり男子の言っている通りなのかなと思ってた」。

この事例でも、鼻くそをほじって食べるということをきっかけとして、特に男子から避けられるようになっていった。鼻くそをほじって食べたことが「汚い」ということであり、それは自他ともに認めることだったようである。そのように評価が固定化されているので、鼻くそをほじることは止めているのに長期間同じ評価が続き、対処を固定化させたようである。このようにレッテルを貼られてそれが教室に広がってしまった場合、自分一人で上手く対処した例はなかった。やっていたことはいじめめかもしれないが、悪いとは思わなかったとする事例26においては、学級会で教師がそれを問題として取り上げ、多くの男子が女子を注意することによって、女子がいじめをやめるという形で終わっている。このように教師の介入が功を奏する場合もあるが、中学年では教師が介入してもあまり変わらない例やそもそも教師や親には話をしなかったという例も多い。

これまでは、中学年の特徴について検討してきた。高学年に進んでも基本的には同じような「いじめ体験」が語られるが、その質は異なってくるように思われる。

4. 小学校高学年の場合

小学校の高学年においては、特に顕著な特徴をもついじめ体験が語られるということではなかった。これまで考察してきた中学年以降に出現するいじめの内容とあまり変わらない。しかし、思春期に近づくにつれいわゆる自我に目覚めることにより、“自分の信念”“自分の主体性”とでも呼びうるものを基盤に置いて対処する事例が現れてくる。主に中学年以降の女子に出現することの多かった、ボスがターゲットを変えて無視する事例では、しばしばこの高学年になってから皆でボスが無視するといったように関係を逆転させることがある。いつまでもボスの言いなりになっているのではなく自分の判断で対処していくのである。まずは女子の事例から見ていくこととしよう。

事例42（小6：女子）

学級の中で体格の良い目立つ感じの二人のボス的な女子がいて、それぞれに派閥を作っておりその中に自分も取り込まれていた。この二人は悪口を言い合ったり、くつついたりしており、その時々二人の力関係によって

いじめられるターゲットが変わるなど友人関係にも影響していた。今にして思えば無視されるなどのターゲットは順番になっていたかもしれない。ある時自分も無視されるようになった。

その時の気持ち→「私がそういうふうは無視されたなって感じたのが修学旅行、社会科見学かなんかで、NHKとか国会議事堂とか東京の方に行った時があったんですけども、その時にちょっと何か変だなって。おいて行かれちゃうなあっていう感じがして、その時には気にならなかったんですけども、また普通の生活に戻ってもやっぱり変だなあと思って。で、無視されているっていうのが分かりました。…あんまり話を聞いてくれないとかがあって…。完全に無視とかそういう感じじゃないんですよ。なんとなく無視されているんじゃないかなって…。自分のことを陰で（悪口を）言っているんじゃないかなって感じ。完全に声かけないとかそういった感じではないけれども、何かそうなんじゃないかなって感じのされ方だった。…なんで私なのかなって（思っていた）。」

対処→「何で（無視されるのか）が分からなかった。すごく悩んだけど、そのグループの中にも、相手にされないなっていうのがすごい分かるから、他の友だちの所へ自然に行くようになった。（そのような事態を）母に話して、そのリーダー格の子に電話かけて、『私何か悪いことした？』って聞いた記憶があります。めちゃめちゃドキドキしました。電話で泣いちゃいました。…それで、結局その電話かけて、ううん、そんな無視なんてしてないよ、何も悪いところなんか無いよ、気のせいだよって（相手が）言うんですよ。でもそうじゃないんですね。やっぱり、次の日学校に行くと、昨日電話かけて泣いていたっていうのが広まっているわけですよ。電話かけた時はそういうふうによしく言われたから、本当に気のせいだったんだって思ってすごく安心しちゃったのに、ああ、あれは嘘だったのだって思って。もうすごい裏切られた。…もうそこにいようとは思わなくなっちゃった」。こうして、このグループから離れて他のグループに行くようになった。

グループから無視されたとき、自分なりに事態に意味づけながら対処してきた事例が事例42だと言えるだろう。グループから無視され相手にされないということは大変な危機的状態である。更に理由が全く分からず自分ではなぜこうなったのか説明不能状態でもあるため動きようがない。グループメンバーから無視されているのではないかという疑念や不安、割り切れない思いだけが募

っていた。そこで事態への対処が始まる。まずは、何が無視される原因なのか原因を教えてもらい関係を修復しようと問題に直面し相手に電話をかける。自分が悪かったらそれを謝って直すから教えてほしいという気持ちが窺える。このとき関係を修復する鍵は相手が持っており、自分は教わる立場である。相手に何を言われるのか分からないので、彼女は相当緊張したというが、このようにして曖昧で割り切れない状況を自らの対処によって打破しようとしている。結果は裏切られる形となるが、その時には「裏切られた!」という強い思いがこみ上げ、自分のおかれた状況に新たな意味づけがなされる。それは平気で人を裏切るようなそんなグループにいるのはもうやめようという決心と諦めである。グループから私が排除されつつあるという状態から、“そのようなグループとは縁を切りグループを捨てる”というように自分が心理的に優位に立てるようになっていくことが分かる。いじめられた事に対して「いじめられている」と認めてしまうことは大変辛いことであるが、自分が相手より心理的に優位に立ち、こちらからそのような人と付き合うのはごめんと確信できる時にグループから抜け出ている。本調査では、このように無視されている状況を直視し乗り越える対処は稀であったが、自分の意志にもとづいて対処する例としては典型例だと思われる。

このほかにも、グループのリーダーからある人を無視しようと言われたとき「せっかく仲のよい友だちなのに、本人同士が喧嘩しているのは仕方がないけど、全然関係ない人が喋っちゃいけないと言うから喋らないっていうのは間違っていると思ったから（自分はターゲットにされていた人に）しゃべりかけていた」と語り、自らの信念に基づいて行動する女子の例などもある。ボスに従うのではなく自分の考えをもってボスを牽制しボスに対抗できる人が現れてくるのである。

女子の事例がグループを背景にして展開されるのに対して、男子は自分と相手との力関係や上下関係という側面からいじめ体験を話す人が多い。そもそも人への接近の仕方、関係の取り方の中に「ちょっかいを出す」「ばーんとはたく」「からかいながら近づく」などがあり、半分優位な気持ちと、半分親密な気持ちがあるような、遊び半分という状況の中でいじめは出現している。

事例46（小6：男子）

転入してきた人と初めは仲が良かったが、次第にその人がガキ大将のようになり自分は下にくっついていくようになっていた。「（そのガキ大将のような人に）殴られたりしたんですけど、…自分が何か冗談とか言う

と殴られるという感じだったので別に嫌とかは無かったですけど、途中からそれに違う友だちとかが混ざってくるようになって。で、自分では何もした覚えなくても、遊んでいると殴られたり、なんか宿題やってこいとか。で途中からすごく嫌になったんです。…あんまり仲良くない奴とか、そんなに友だちでもない奴にも嫌がらせをやられるようになって。…あと、他の友だちからも、結構嫌われている人もいたんですけど、そいつも自分に嫌がらせみたいな事をやってきて、授業中に絵を描くのにマジックとか使ったりしたときに、俺のジャージに落書きしたり。そいつにはやり返したりもしたんですけど、…なんでこいつにまでやられなきゃならないんだろっていう気がして、一番悔しかった思いがあります」。その時の気持ち→「いじめられているというのを知られるのが恥ずかしくて、それで誰にも相談しないで、先生とかにも全然相談しないで、我慢してて。一人で学校から帰ってる時とか家に行ってから、何で自分だけやられるんだろとか、なんか自分が情けなくなってきて、やり返せない自分が情けなくなってきて、結構泣いたりしたんですけど。たまに口でやめろくらいは言ったりもしたんですけど、全然。やっぱり結構人数がいたので言っても効果がなくて。自分がちょっと嫌いになっちゃって落ち込んだんです」。

男子の場合、遊びからいじめに発展するケースが多々語られる。被害者にとってそれは 紛れもない被害体験なのだが、一方加害者にとっては遊びの気持ちが強い。この事例ではないが、自分は相手に「つつこみを入れている」だけだと思っていたが、実は相手はいじめられていると感じていたという例などもある。特に高学年の特徴としては、そのからかい程度つつこみ程度のいじめ遊びが起きると、それがあある吸引力を持つようになり、あまり関係のない周囲の者をも引きつけて拡大し、エスカレートするというのが特徴であろうと思われる。事例46ではガキ大将と自分の間で行われているだけならまだよいが、それよりも周囲の者が理由もなく加わってくるので嫌だったという。特に、皆から嫌われており自分は下に見ている同級生が攻撃してくることに對して、最も悔しい思いを感じていたようである。また、いじめられている事実が知れ渡ることを恐れるがため誰にも相談しなかったという。自分が下っ端のいじめられっ子として周囲から見られることは最も避けたいことであり、そのための対処としていじられていることを隠蔽し、いじめはないことにしてしまうことも典型例として挙げられよう。男子のいじめがこのように被害者から隠され加害者

は遊んでいるつもりという場合、いじめはエスカレートの様相を呈する。

事例3（小6：男子）

「どこでどうしてそういう経過になったかは思い出せないんですけど、トイレ掃除の当番だったのかな。掃除か何かをやっている、いきなりトイレ（の個室）に閉じこめられちゃったんですよ。で、友だちが外ではやしたてていて、僕としてはある種遊びの延長っていう感じで捉えていたんですけど。そうやって『開けてよ』と言っても、笑っているし、まあ、それくらいならいいけど、…どんどんエスカレートしてくるもので、そのうち上からスリッパとかいろんなものを投げ込まれて、まあそこまでは自分の中で耐えられたんですけど、でもクレンザーが粉をまき散らしながら降ってきて、それがもう我慢が出来ないといった感じで、トイレの上からのぞき込んでいる人もいて…、人前で泣くって事は負けたっていう感じがあったんですけど、その時は声を出さずに涙を流してっていうような。…はっきりといじめられていると感じていた出来事の一つですね。」

終わり方→泣いていたら周りの友だちもまずいという雰囲気になり、ドアをあけてくれた。自分が濡れていたのので皆で日向ぼっこをしながら乾かして「ごめんね」というふうに謝られて終わった。

この事例ではあらかじめ嫌われていてそのためターゲットになったという雰囲気ではない。最初は遊びの延長と捉えていたが次第に遊びからエスカレートして本人にとっては制御不可能になっている。もしかすると加害者側も制御できない状態になっていたのかもしれない。「トイレの上からのぞき込んでいる人もいた」という情景が象徴するように、クレンザーをまかれ上方から下にいる自分の姿が見られているときに耐え難くなり泣いてしまったという。いじめられている惨めな自分の姿をのぞき込まれることに耐えられなくなったのだろう。このようにいじめがエスカレートすると一人では何も対処できなくなり、誰も納めどころが分からなくなり対処できなくなる。本事例のように泣くことで周囲がまずいという雰囲気になったのは幸いだが、これが更にエスカレートする可能性もあるだろう。上下関係・力関係の中で生活している男子にとっては、ある人がドアを閉めたら、今度は違う人が“俺はスリッパを投げることができるぞ”、“俺は水をかけることができるぞ”、“俺はクレンザーを撒くことができるぞ”、という具合に自分の力を誇示しエスカレートする可能性は十分に考えられる。そし

て、被害者側はそれを隠蔽するという対処をした場合、事態は悪化の一途をたどりかねない。このように高学年にいじめられたという男子の場合、事態を改善するというより自分が力関係の下に位置付かないようにすることで必死になることが窺え、それは隠蔽という対処を形作ることが示唆されている。

小学校の高学年になると長期的にいじめられてきた人たちが新たな対応を目指す人もいる。ここでも自我の芽生えを感じさせるような対処に変わる。小学校の1年時からいじめられ、4年の時から保健室登校を始めていたある女性は次のように語る。

事例55（小6：女子）

「5、6年の時は特にひどくいじめられたというのではないですけど、何か（周囲と）馴染めないんですよね。…だから休み時間とかでも絵を描いているとか。小さいときから美大に行きたいと思っていたのですけど。周りの子の私の印象は、性格よりも絵が上手いという、そういう目で見られていました。人と付き合うよりも絵を描いていた方が良かったというのがあって。」

このように、周囲の人や出来事に合わせていくというのではなく、自分の好きな絵を描いているなどと、自分の好きなことや自分の夢に焦点を当てて過ごす例もある。他にも、大量の本を読んだりしながら自分の世界を作って周りをシャットアウトし、周りの情報を遮断して過ごしていたなどという例もある。長期的にいじめを被るという過酷な状況の中、自分の世界、好きなことをしながら学校生活を送るという仕方でも対処する人も現れてくるのである。また、目撃者の立場であった人が、加害者たちに一人で注意したり、「～菌」と長期間避けられていた人のことを一人学級会で「自分はその人が汚くないと思う」と宣言していじめをなくした例もでてくる。このように自分の世界、自分の信念や思いに従っていじめに対処する例が現れてくるのが高学年の一つの特徴と言えるだろう。

小学校の例は低学年時には大人の助けを借りながらいじめを切り抜け、中学年になるとグループ内で子どもだけで対処しはじめ、高学年になると自分というものを意識して事に臨む者が出現してくると言える。小学校での「いじめ体験」は主に教室での人間関係が中心に語られることになるが、中学校になると多少変わってくるように思われる。次に中学校での「いじめ体験」とその対処に進んでみよう。

5. 中学生の場合

中学生になると小学校とは異なる雰囲気の中で学校生活が始まる。いわゆる学校文化が人間関係に影響力を持つようになる。例えば、後輩は先輩に会ったら必ず挨拶せねばならないという上下関係の厳しさが暗黙の掟となっていたりする。中学校の「いじめ体験」では、小学校ではあまり意識されなかった見えない力が所々に対人関係に作用してくる。まずは、中学校での「いじめ体験」と一緒に語られた学校の特徴、つまり、いじめ体験に影響してくる中学校の特徴を取り上げてみよう。

異なるいくつかの小学校出身者たちによって学級が構成される場合、それぞれは知らない人であることも多い。人によっては他の小学校出身者とその時点で心理的な壁を感じることもあるようだ。ある女性は次のように語る。「中学校になって、もう一つの小学校とくつついて、もう一つの小学校が私のいた小学校とすごい雰囲気が違って、もっとスレている人たちで。一番印象に残っていることは、私の学校では『無視する』という言葉を使っていたんだけど、もう一つの小学校の子は『シカト』って言葉を使って。その『シカト』って言葉をすごく頻繁に使って『あいつシカトしてやる』とかすごく多くて、それがすごく嫌で怖いと思いました。…雰囲気が嫌で。平気で『あいつシカトしてやる』とばんばん言うような。実際にするかしないかは別にして、そういう言葉がしょっちゅう出てくるのが嫌だった」。

この例は、自分の小学校出身者と他の小学校出身者の背負っている学校文化の違いにより圧倒されている例と言えよう。この「○○小出身者」ということが表しているように、背景としてその人の所属するグループカラーが自ずとでき上がり、中学校ではいろいろな特徴をもつグループが形成されていくのである。不良グループ、真面目・良い子グループ、勢力の弱いグループ、同じ部活動のグループなどである。気の合う者たちがつながりサブカルチャーを作り出すといったように、これまでとは多少異なる新たなグループ化がなされると言えるだろう。そして、このサブカルチャーが一方ではいじめの舞台を作り、また他方ではそれが対処の資源ともなりうる。中学校での対処の幅を決めるのは、このようにある程度固定化した仲間関係の中であって、如何にいろいろな所とネットワークを築いておけるのか、または固定した中で確固とした友人関係を維持していけるのかということころが重要となってくる。中学校の「いじめ体験」は以上の特徴を下地としつつ話されることが多い。ある女子の事例を見てみよう。

事例69（中2：女子）

クラスの中で勢力を持っている不良っぽい2、3人の女子に目の敵にされていた。その人たちはトイレ掃除などが一緒になると近くで自分に聞こえるように陰口を言う。「髪の毛うっとおしいよね」「あの人うっとおしいよ」などと言われていた。「気にいらねえ」という目で見られており自分はおどおどして半泣き状態だった。しかし、そのような自分の姿を人前にさらすようなことはしたくなかった。

いじめられるきっかけ・理由→きっかけとなる事件らしい事件はなかった。要因としては自分が勉強が出来て人気があったところだろう。学校では髪の毛を長く垂らしておくのは校則違反だったが、自分はその校則を守らず髪の毛を垂らしていた。勉強のできない彼女たちから見ると、注意されない自分は、勉強が出来るため優遇されているように見えたのかもしれない。

当時の気持ち→辛く何も言えず黙って通っていた。自分をいじめる方向に相手の流れが向いているのを感じていたので、通り過ぎるのを待っていた。いじめというより、よくある女の子同士のいがみ合いと思い意地悪をされている、嫌われていると思っていた。

対処①→休み時間などは他クラスの友人の所に逃げていた。陰口を言われているなどということを引きずらないで接してられる人だったので、いじめのことは話さなかった。

対処②→どこのグループにも属さず誰とも敵対していないお姉さんタイプの同級生が支えてくれていた。自分が泣きそうになっている時に「あんたのこと言っているのじゃないから大丈夫だよ」という感じでその人は接してくれていた。

対処③→自分に陰口を言うような人は、クラスでは幅をきかせていたが、学年全体の不良仲間の中では下層部だった。「どうせ大したことねーじゃん」という気持ちもあった。相手の女子は自分の悪口を言っているけど、自分は男子がその子たちの陰口を言っているのを聞いたりしていた。

ある出来事（中3時）→「スカートは一回なくなったけど、それは特に私に対する敵意を感じないケースで。（自分は）背が高かったんだよね。その頃ってヤンキーが長いスカートをはいていた時代だったんだけど、なくなったのが修学旅行の前だったのね。修学旅行はキメキメで行きたいという田舎の中学生の発想で、ヤンキーが長いスカートをはきたさにあたしのスカートをとっていうのも考えられるし。私に対する敵意を全く感じないで突然スカートがなくなって。クラスもどうしたんだろうね

えって。…それは本当になくなって、友だちのスカートを借りてそれで何にもなかったっていう感じ」。

この事例では特徴的な対処が様々になされている。自分の受けている仕打ちを引きずらないですむような、全く違う関係の友だちの中に逃げたり、受けている仕打ちを知らながらも助けてくれるサポーターと事態を共有するなどである。中学生では部活動の友だちやクラスの友だち、小学校時代の仲良しなど友人関係の広がる人は多く、それは自分を支えてくれるサポーターが増えるということである。つまり自分を違う文脈の中で生かすことができるということであろう。ある女性は「クラスの顔と部活の時の顔と家に帰ったときの顔があった」と言うなど、いろいろな場において自己を使い分けられることができるようになるのである。この事例は自分のネットワークをフルに活用し様々な顔を駆使して対処した例だろう。更に勢力のある相手に追い込まれないように、知的操作を加えて対処してもいる。相手は不良グループの中では下層部であると分析したり、男子に悪口を言われていると情報を収集し自分を優位に保つことによって自尊心を維持しているように思われる。このようなことができるということは、状況に没入した中での対処というのではなく、少し距離をおき事態を客観視して対処策を編み出せるということである。もう一つ被害を受けた時のユニークな対処としてスカートの件がある。この場合、なぜスカートがなくなったのかということは不明であり、見方によっては、修学旅行前にこの人を困らせようとして誰かが隠してしまったと捉えることもできる。この曖昧な状況の中、事態を説明する方法として、犯人は誰かは分からないが「田舎のヤンキーが長いスカートをはいて恰好をつけたためにやったのだろう」といったように自ら受け入れることの出来る形にストーリーづけて、そのストーリーを友人たちと共有しその物語を生きるという仕方に対処している。これによりいじめられている惨めな自分ということが公になることはなく、自分がいじめられているというストーリー（噂）も最小におさえることができる。このように事態をストーリーづけることができるのは、やはり状況の外から自分や自分に降りかかっている事態を見つめることが出来るからであり、問題を客観視することができるからだろう。

このほかにも女子に特徴的だったローテーション型のいじめは中学生においても散見された。しかし、それは小学校時のようなものでなく、グループ内に強力なボスがいなかったため中途半端に終わるケースが多い。グループが気の合う人や似た人で構成されているということ、及びそれがために強力なボスが台頭しないためだろう。一

度はグループ内の強い人の命に従ったが、そうすると自分の活動範囲が狭まり生きにくいのでやめてしまったという例もある。他にも、女子中学生の「加害体験」の中には、小学校時代に幅を利かせていたボスを皆で仕返するという例が意外と多く話される。ひどくいじめるといではなく、元ボスの言うことに対して聞こえない振りをする、元ボスをおいていくなどのことである。これは気の合う者同志が集まり固まって、気の合わない人、グループと距離をおくということのようだ。

女子が仲の良いグループで固まるのに対して、男子の場合多少趣が異なり“乗りが合うかどうか”ということが重要になってくるように思われる。この乗りの中で生徒同士の間関係・力関係と結びつき遊び感覚でいじめがなされるとき、いじめが起きている現場は力の集中する場になりいじめは激しさを増し残忍さを帯びてくる。そしてそのターゲットになる人物像はある程度固定化されていく。激しくいじめられている人を目撃してきた人たちの証言によるといじめられやすい人物像は次のようになる。「やっぱ、きれやすいかね。すぐ泣くとか…弱い部分があった」、「やめろよっていうことは言ったりしてたんですけど、こういうことをしても、まだ付け入るすききがあるっていうかな、まだ余裕があるんじゃないかっていうような気にこららをさせてしまうっていう…」、「物を取ってこいって言われて、文句言いつつも結局やっちゃう」。いじめられるということはこのようにある種のつけ込まれやすく傷つきやすい (vulnerable) 人でもある。そのつけ込まれやすさは例えば次の内容から窺える。「巨人ファンで演歌好き。おやじみたいな趣味でおとなしいタイプ。何されても嫌がらない、嫌がっていたのでしょけれど嫌がってた風には見えないでへらへらしていた」。この傷つきやすさ (vulnerability) は「攻撃誘発性」と翻訳される場合もあるように(4)(5)、相手を引きつけ相手が攻撃のエネルギーを向けたくなるような因子を抱えている。次の例はこの傷つきやすさを抱えた生徒を目撃していた例である。

事例33 (中3：男子)

「中3の時にね目撃はあるね。これはひどかったね。違うクラスのT君っていうんだけど、何かこう、ちょっと変な奴だみたいな。確かにちょっと変な奴だったんだよね。ちょっとおかしい子どもっぽい子だったかなあ。笑いのつぼが違うわけよ、人と。でちょっと変わっているっていうんで。僕は何がきっかけだったか分からないけど、朝とかにT君が来る前に、T君の机があるじゃない。そこにゴミ箱から色々な牛乳パックとかジュースの

パックとか紙ゴミとかをわざわざ出して机の上に置いておくわけよ。で、T君が登校してきてかなり激怒して「誰がやったんだよ！」っていう感じで。でももちろん俺がやったなんて言うわけないから。で結構クラスの中でもボス的なのがいるじゃん。そいつがやったんじゃないかと思うんだけど、「Tうるせーな」っていうわけよ。ギャーギャー騒ぐなって。でTはもっと興奮して、勝てないんだけど、そいつに挑みかかっていくわけよ。何かもうカーッととなった時に、周りからちゃちゃを入れられる。そして更に攻撃の手が加えられていくわけ。そいつがやったわけじゃないんだけど、お前うるさいとか、静かにしろよとか、ゴミ捨てろよとか。机の上にゴミがたくさんあるから (Tが) ばーっとよけるでしょ。そうするとちゃんと捨てろよとか言われたりして、そうするとTも「うるさい！」とか言って、イスとかもガンって投げたりとか、ある時はナイフとか包丁とか分からないけど、そういうのを振り回して暴れたときもあるっていう話を聞いた覚えがあるけど。…ちょっと変わっている奴を笑い物にして遊ぶみたいな。」

きっかけ→「Tはすごく勉強するんだよ。でも成績良くないわけ。でちょっと挙動不審な所があって、声とかも高く、そういう変わった部分をもっていて、あいつはちがうというような感じで始まっていた」。

その子と自分の関係→T君と自分の友だちが同じクラスだった。その二人が同じラジオ番組を聞いていて、自分もそれを聞いていたので、そういうつながりで自分の方からT君に話しかけるようになった。そうしたらT君からテープを借りたり漫画の趣味が合ったりした。Tは小学校以来の友だちも地元にて、その人たちと共通の趣味を持って遊んでいたのが救われているようだった。

小学校高学年における男子のいじめは、エスカレートする可能性を秘めていたが、それはある種、教師や周囲の者からは隠された場 (遊んでいるとき、トイレなど) においてであった。それに対して中学校での出来事である事例33では、教室の机と言うように、隠すよりむしろ公な場でなされている。行っているのがボスであることからこのT攻撃に参加することがこのグループメンバーであることの証明、かつ力の証明であるような様相さえ窺える。また、ゴミに対してTが激怒しながら「誰がやったんだ！」と言うと、ボスらは「騒がしくしない」という教室内では一般的に正論となっている言説を持ち出す。Tがゴミを払いのけると、次は「ゴミはゴミ箱に入れる」とまた正論で攻撃するといった具合に対応と攻撃が連鎖しセットとなり、Tの対応がT攻撃の根拠を形作る状況を生み出す。こうしてTの対処がことごとくボ

スの思うがままになり相乗効果で事態はエスカレートする。Tはボスによって状況づけられることとなり、ボスの支配する手の内に対処せざるを得ない。このような事例は「加害体験」や「被害体験」としてよりも、「目撃体験」として語られる。このような事態には「入っていない」「少し注意しても聞いてもらえなかった」などの証言が多いが、二者が連鎖して一つの状況を生み出すので第三者は何もできないようである。攻撃誘発性に目撃者の方も触発されている場合は、「やられている方も悪い」としてあきらめの気持ちにもなるようである。本事例の場合は、その状況とは直接関係しない隣のクラスだった目撃者らが、同じラジオ番組を聞いているという所からつながりネットワークが広がった。Tにとっては一つの救いとなっていただろう。また、地元にも小学校時代からの気の合う友人とも関係が持続出来ていたことも救いになっている。他の男子のいじめられ体験の中には自分が価値を置くもの（部活動、勉強、趣味など）があったため、自分の受けていることは辛いものの切り抜けることが出来たとする例が多い。中学校では人間関係が広がり、教室だけの人間関係に縛られないですむ分、サポーターも広がり息抜き、自尊心を回復する場があるように思われた。中学生の場合、自分を生かす場を見つけだすというのが一つの対処になっていると言えるだろう。

中学生においては、事態を分析し情報を収集したり、事態を受け入れやすいようにストーリーづけその中で生きたり、自分を生かす場を探し出すなど、自分の肌にあうグループを捜し出しそこで周囲と事態を共有したり、または全く異なる文脈に自分を据え置く対応がなされる。自分の肌に近い、自分を生かせる場を求めることは一つの自己探求と言えようが、このことは更に高校での対処とつながっているように思われる。最後に高校での「いじめ体験」およびその対処について検討してみよう。

6. 高校生の場合

高校生の「いじめ体験」においては、小、中学校時で蓄積してきた自分なりの体験を通して自己の在り方への問いの発せられている内容が多くなる。多くの被面接者から語られるのは、グループや友人らの中における自分のスタイルのようなものである。つまりいじめられても、その経験を通して自分はどうかという内容が語られる。本調査に限ったことかもしれないが、この傾向は男女ともあまり変わらないように思われる。高校入試によって能力が均衡するというのも一因かもしれない。

事例9（高1：女子）

「自分は結構目立つことが好きで、リーダーとかしていたんですよ。そうしたら仲の良かった3人くらいが、それが嫌だったのかは分からないけど離れていっちゃって、で、ポケベルにイタベルとかが入ってきて、そういうのが一番嫌でしたね。」

その友人たちは自分に話しかけてくれることはなく、自分から話しかけても、話に加わってもいいよとは言うものの、何かよそよそしい態度だった。輪の中に入れなような雰囲気を作られてしまった。「ポケベルが本当にショックで、（相手の）名前とか電話番号とか入らないじゃないですか。だから夜中とか怖かったですよ。（内容は）結構きついことが入っていましたよ。お前には友だちがいないんだみたいな。だから電源切っちゃったんですよ。でも次の日普通に学校に行かなきゃじゃないですか。それで、次の日違う友だちの前で泣いたんですよ。それを相手は見えていたらしくて、それからイタベルは入って来なくなりました」

対処→学校を辞めようかと親に相談したら、「あんたは強いんだから、そんなんでくじけない」って言われた。部活の友だちにも「部活は辞めたくないけれども学校は辞めたいといったら、学校を辞めたら部活も出来ないんだよって言われて、それで吹っ切れた」。

その経験をもとに→「高校2年くらいから、そういう仕切るっているのが嫌になったんですよ。これから絶対仕切らないでおこうって。…陰の仕切る人、陰でみんなをリードしていきたくないって思ったからほんと表に立って仕切るっていうのは嫌なんですよ。…陰のっていうのは友だちの相談に乗ってあげたりとか。仕切るのって良い仕切り方もあるし、悪い仕切り方もあるけど、良い仕切り方っていうのはやっぱ、影なんですよ。みんなの気持ちをくみ取りながらやったほうがいくなって。仕切る人って大声出すじゃないですか。しかも何か出すもの出さなかったら怒るよっていうじゃないですか。そういうのはみんな嫌だと思うから。」

このように、いじめられたという経験を生かして自分のスタイルを模索し始めているようである。以前のスタイルを変えてみたら、自分の明るさや性格など無理に変えることなく、しかも友人たちから相談を受けるような立場になってきたとこの人は言う。いじめられて苦しいという話より、それを通して自分はどのようになったのかという語り口である。そのほかにも、高3の時に「勉強や友人関係ともそつなくやっているが、むなしく、自分の方に関心が向き、暗く沈んで、自分で自分をいじめ

ていた」という人もいる。また、小学校時代からずっと友達と合わず仲間外れにされそうだったので、仲間をいつも追い求めていたという人が、高校時代にボランティアを通して友人を作り、そのことを通して、自分のように一人でいることも良いことかなと思えるようになってきたという人もいる。もちろん、暴力を振るわれていたなどの目撃証言もあるのだが、多くはいじめというより嫌な相手に対して自分は如何に対応するかという人間関係のトラブルであったり、自分のスタイルの模索、アイデンティティの模索というニュアンスで語られはじめもする。高校での「いじめ体験」は自分のスタイルが前提となりえて、その対処も、いじめを“どうするか”というより、それを通して自分は“どのようになるのか”を考える資源にし始めてくるようである。

7. まとめ

これまで小学校の低学年から高校に至るまでの「いじめ体験」を引き合いに出しながら、大雑把ながら学年によるいじめの質の違いとその対処について検討してきた。言うまでもなく、ここで検討してきた対処とは、必ずその学年で行われると言うのではなく、またその対処が他の学年においてはなされないという意味でもない。男子の暴力は低学年から高校まであるし、同様に女子の場合、それは仲間外れであったりする。しかし、第6章で指摘されているように、学年による発達差やグループの質の違いがある以上は、いじめの認識及びその対処も発達すると思われる。その側面から面接調査を検討してきたのが本章であったので、最後に対処について少し見えてきた視点についてまとめてみよう。

これまで見てきたように、対処は、自己とその他の様々な他者との狭間で次々と繰り返される。従って、対処の発達には次の二側面が見出されよう。それは自己の成長という側面と、対象関係の広がりといった側面である。自己の成長と考えられるのは、自分の信念、ボスへの反抗心、恐怖心、自分のスタイルの模索など自己の内面にその軸を置いた時に捉えられる。人から攻撃され殴られても、「自分は人を殴ったりすることは絶対にいけないことだと思うのでしたくない」という信念を持って非暴力で対抗しようとしたり、グループを変える決心をしたり、いじめてくる人を反面教師として「あのような人にはなりたくない」と距離を置いて眺めたりすることである。ボスに従いつつ新たな展開を待つということなど様々あり得る。そして、このことを支えるのがもう一つの側面である対象関係の広がりであろう。対象関係は大人や友人、ボスやガキ大将といった対人関係だけでな

く、趣味、勉強、部活動といった対象との関係である。グループから離れる決意を支えるのは、他のグループがあるという背景であったり、自分の趣味の世界でもあり得る。教室で齟齬をきたしていても部活動が支えになっていることもあるだろう。いじめられてもグループの人が助けてくれるという安心感が支えになることも大いにあり得る。これまでに培ってきた様々な対象とのネットワークの広がりがあるものを言う。

しかしながら、特に、いじめとの関係で対処を捉えるためには、上記の二側面とは異なる側面からのアプローチも必要になってくる。それは、対処が政治的に組み立てられていくという側面である。小学校中学年で現れてくるボスは独裁者として位置づけることもでき、支配される者たちは抑圧されながら従っている。その鬱積が高学年になってからボスへの反乱の力になっている。身だしなみが何となくだらしない者を攻撃する時、その攻撃行動を背後から支えているのは、清潔であるべきだというイデオロギーや正当性の主張であることもあろう。自分がいじめられているということを隠そうとするのは、自分がみじめになるというだけにとどまらず、世論とも呼べるような人の評判や風評、噂をも気にするからである。いじめの傍観者たちは自分が巻き込まれないため政治的無関心を装うこともある。その他、いじめの起こる場には様々な背景がある。ある人やグループの人気、グループ内の派閥、派閥同士の同盟関係、仲間内の制裁、他グループに接触する際の書簡ともいべき手紙、他グループへの亡命といったように、対処を形作っているのは心理的側面だけでなく政治的場の力学も大いに影響している。教室の権力といじめとの関係については、第4章に詳しいが、対人関係上の危機が現れてくる時の、その背景となっている“政治的な場の力”を考察する中に、いじめに対する対処(coping)の生の知見が得られると考えられ、今後、さらに検討してゆかねばならない課題となろう。

註

- (1)氏原寛、近藤邦夫他編 『カウンセリング辞典』 ミネルヴァ書房 1999
- (2)R.Sラザルス,S.フォルクマン 『ストレスの心理学』 本明寛ほか監訳 実務教育出版社 1991
- (3)すでに述べられているように、被面接者たちが当時を振り返り、自分が如何なる立場にいたのかというその立場性から、それぞれを「いじめた体験(加害体験)」、「いじめられた体験(被害体験)」、「目撃した体験(目撃体験)」とし、これらを総称して「いじめ体験」と

する。

(4)中村雄二郎 『術語集』 岩波新書 1984p.p.106～110

(5)竹川郁雄 『いじめと不登校の社会学—集団状況と同一化意識』 法律文化社 1993

参考文献

東京都立教育研究所 「いじめの心理と構造をふまえた解決の方策」 1998

中井久夫 「いじめの政治学」『アリアドネからの糸』みすず書房 1997